

# 井上円了『八宗綱要ノート』の思想史的意義

仏教・哲学一致論の前提、および吉谷覺寿の思想

佐藤厚  
satonu atsushi

## 一 はじめに

井上円了『八宗綱要』<sup>はっしゅうこうよう</sup>は、井上円了（一八五八—一九一九、以下円了と略称）が明治一八年（一八八五）後半に、凝然<sup>ぎょうねん</sup>『八宗綱要』をもとに作成したノートであり、現在、東洋大学図書館に所蔵されている<sup>(1)</sup>。本稿ではこの著作の名前を、凝然の著作と区別するために便宜的に『八宗綱要ノート』と呼ぶことにする。

この『八宗綱要ノート』（以下本書）は従来、井上円了の研究において注目されてこなかったが、筆者が内容を調査したところ、円了の代表的な思想である、仏教と西洋哲学とが一致するという考え方（以下、仏教・哲学一致論）の前提となる思想が説かれていることが明らかになった。加えて、これが円了の東京大学在学時の講師であった吉谷覺寿<sup>よしたにかくじゅ</sup>（一八四三—一九一四）の思想である可能性が高いことも明らかになった<sup>(2)</sup>。すなわち、本書は円了の初期思想の解明、および思想的影響関係を明らかにする上で重要な資料であることがわかったのである。小論では、これらについて簡単に論じたのち、本書の翻刻を行い、円了研究の一資料として学界に紹介したい。

## 二 『八宗綱要』と近代日本仏教

本書のもととなった『八宗綱要』とは、鎌倉時代の凝然（一二四〇—一三二一）の著作である。内容は、最初に仏教の教理と歴史に関する総論を述べた後、①俱舍宗、②成実宗、③律宗、④法相宗、⑤三論宗、⑥天台宗、⑦華嚴宗、⑧真言宗の八つの宗派、および禅と浄土教とについて、その系統と教理とを簡潔に整理した綱要書である。本書は古来より、仏教史、仏教学の基礎の書物として扱われてきたが、近代になってからも新たな役割を担うこととなった。

明治維新後、明治新政府は国の中心を天皇に置き、宗教は神道を重視した。ここから従来、神仏習合の形態を有していた寺社において、神仏の切り離しが行われ、その途上で廃仏毀釈と呼ばれる仏教に対する攻撃が各地で起こった。その結果、江戸時代までは国教に準ずる教えとして優遇されてきた仏教が難局に立たされることになった。さらには維新後、日本には西洋の文物が続々と流入して世間の耳目を集めていった。その中でもキリスト教は積極的に布教を行い、信者を獲得していった。

このように明治初期の仏教界は、内的には神道に対して、外的にはキリスト教に対して、自身の存在意義を打ち出す必要にせまられた。ここで重要なのは、これは宗派単位での事件ではなく、宗派を総合した「仏教」という枠組みでの問題である。

それでは明治の仏教者たちは、各自が所属する宗派ではなく、総合体としての仏教をどのように提示しようとしたのか。ここで『八宗綱要』が登場する。前述したように、『八宗綱要』は、最初に仏教の総論から説き始め、その後、日本の各宗派の系統と教理とを述べる。すなわち総体としての「仏教」から現存する諸宗派までの関係を網羅的に提示しようとした時、『八宗綱要』が適当だったのである<sup>(3)</sup>。この中で大きく二つの動きが現れる。

第一は、明治期に各宗派で整備された仏教教育の課程の中で『八宗綱要』が必須科目となったことである。その理由は、『八宗綱要』が分量が短いながらも仏教学の重要な術語が網羅されていることもあるが、何より仏教全体の流れの中で各宗派を位置づける内容だったからである。

第二は、『八宗綱要』の枠組みを用いて明治初期の日本仏教を整理する作業が行われたことである。すなわち、明治一九年（一八八六）、真宗大谷派の小栗栖香頂（おぐもり かうちやう）（一八三一—一九〇五）は、日本の十二の宗派の相承と思想とをまとめた『仏教十二宗綱要』（4）を著わした。翌年の明治二〇年（一八八七）には浄土宗の町元吞空（まちもとどんくう）（生卒年未詳）が小栗栖の『仏教十二宗綱要』を註釈すると同時に新たに三つの宗派を加えた『十二宗綱要』（5）を刊行した。さらに明治二三年（一八九〇）には吉谷寛寿が『明治諸宗綱要』（6）を著わした。

これらは明治初期の仏教界の問題を『八宗綱要』をモデルとして解決しようとしたものであった。

### 三 井上円了『八宗綱要ノート』の成立と内容

#### （一）成立

本書の表紙には「八宗綱要」という題目と、「文学部研究生 井上圓了」と身分と氏名が記されている。円了は、明治一八年七月十日に東京大学文学部を卒業し、約二週間後の明治一八年七月二十五日付で官費研究生に選ばれた。さらに翌年の明治一九年の三月二日に帝国大学に大学院が設置されると大学院に進学している<sup>7</sup>。このことから、このノートが作成された「文学部研究生」の時代とは、明治一八年七月二十五日から明治一九年の二月までの間ということになる。

ところで本書の中に、本書の成立が明治一八年であることを窺わせる記述がある。すなわち「第七 結集三

蔵」と「第八 仏教流伝」の中には、ある出来事が起こってから「明治十八年までは〇年」という文がある(8)。ここから本書が明治十八年に著わされたのは間違いない、よってその成立は、明治十八年の七月二十五日からその年の終わりの間と推測できる。ただ円了は東京大学三年生の時(明治一六年九月から一七年三月まで)に吉谷覺寿の『八宗綱要』の講義を聴講していることから(9)、本書の成立とは少し時間の開きがあるのが疑問として残る。

表紙の見返しには、「明三慧著 諸宗祖師略伝」とメモ書きが記されている。明三慧という人物は仏教辞典には出てこない。インターネットで調査したところ、彼は現在の山口県出身の浄土真宗の僧侶で、『各祖縦覧』(明治十五年)、『諸宗祖師略伝』(明治十六年)、『浄土真宗源流編』一名・見真大師年譜』(明治二十四年)、『御伝鈔簡要』(明治二十五年)、『蓮如上人開導録』(明治二十九年)、などの著作がある(10)。

## (二) 内容

本書は筆写本で全部で三六丁からなる。内容は、おおむね『八宗綱要』の内容に沿ってテーマを掲げ、それぞれの内容をまとめている。まず本書と凝然の『八宗綱要』の内容との対応を見てみる。

〈表二〉円了『八宗綱要ノート』と『八宗綱要』原本との内容対照表

※は円了『八宗綱要ノート』の中で『八宗綱要』原本と関連しない項目を示す(詳細は次節で述べる)。

第十六	三世次第	總説	『八宗綱要』
第十五	四諦名義		
第十四	有漏無漏		
第十三	俱舍大綱		
第十二	仏教宗派 ※		
第十一	教学關係 ※		
第十	善惡業感 ※		
第九	四門入理 ※		
第三	仏教分齊		
第八	仏教流伝		
第七	結集三藏	俱舍宗	『八宗綱要ノート』
第六	三学名義		
第五	三藏名義		
第四	大小二乗		
第二	三法印義 ※		
第一	諸法原理 ※		

第三十三	第三十二	第三十一	第三十	第二十九	第二十八	第二十七	第二十六	第二十五	第二十四	第二十三	第二十二	第二十一	第二十	第十九	第十八	第十七
三種無性	三種自性	三時教義	法相大綱	法体四相	化制二教	止作二門	律宗大綱	二執二障	成実大意	生空法空	三乘因果	五位諸法	諸法相攝	有為無為	法体恒有	
(ナシ)																
法相宗				律宗				成実宗								

この表からわかることは、本書の形式的な問題としては、第一に第三十三番目は、数字のみが記され内容が書

かれていないこと、第二に、第三の仏教分齊の項目が、第二と第四の間ではなく、第八と第九の間にあることである。

続いて内容の対照から言えることは次のことである。内容は大きく五つの部分に分けられる。第一に、第一題「諸法原理」から第十二題「仏教宗派」までは、『八宗綱要』では総説にあたる部分である。第二に、第十三題「俱舍大綱」から第二十二題「生空法空」までは俱舍宗の部分である。第三に、第二十三題「成実大意」と第二十四題「二執二障」は成実宗の部分である。第四に、第二十五題「律宗大綱」から第二十八題「法体四相」までは律宗の部分である。第五に、第二十九題「法相大綱」から第三十二題「三種無性」までは法相宗の部分である。このように本書は『八宗綱要』の中、総説の部分と①俱舍宗、②成実宗、③律宗、④法相宗について記され、⑤三論宗、⑥天台宗、⑦華嚴宗、⑧真言宗、禪と浄土教については記されていない。

さらに、この中で注意されるのは総説の部分である。『八宗綱要』の総説は、仏教の教理と歴史の概説からなる。教理の概説では、一、仏教の法門に八万四千があること。二、それは衆生の煩惱に八万四千の煩惱があるからであること、三、それは大乘と小乗とにそれぞれ八万四千があること、四、これらの法門を収めるのに声聞しやうもん藏ぞうと菩薩藏ぼさつぞうの二藏、素坦覽藏そたらんぞう、毘奈耶藏びなやぞう、阿毘達磨藏あびだつまぞうの三藏があることが説かれる。続いて歴史の総説は、インド、中国、日本の各国の仏教史の歴史的展開を述べ、最後に日本の八宗を述べて終わる。

さて、これらと本書の第一から第十二までを比べてみると、『八宗綱要』総説に対応する部分（六項目）と対応しない部分（表一に\*で示した六項目）がある。この中の対応しない部分が重要である。それらを簡単に説明すると、①「第一 諸法原理」は、教法の発生原理について、俱舍宗、法相宗、天台宗・華嚴宗で違いがあることを説く。②「第二 三法印義」は、仏教と仏教以外の教えを判別する基準となる三法印すなわち、諸行無常しよぎやうむじやう、

諸法無我、涅槃寂靜について述べる。③「第九 四門入理」は、真理に入る道には有、空、亦有亦空、非有非空の四門があることを述べる。④「第十 善惡業感」は、人間の境涯に差別があるのは業によるものであることを述べる。⑤「第十一 教学關係」は、宗教と學術との關係について述べる。⑥「第十二 仏教宗派」は、仏教宗派が分かれたのは凡人の誤解から生じたものではなく、人間の能力の違いによって本来的に仏教の教説に違いがあるものであることを述べる。

これら六項目の中、①「第一 諸法原理」、②「第二 三法印義」、③「第九 四門入理」、④「第十 善惡業感」の四項目は、仏教全体にかかわる基礎的な理論である。いわばこれらは『八宗綱要』の名を借りて、新たに導入された仏教の基礎理論ということがいえる。続いてこれらの教説と円了の仏教・哲学一致論との関連を見ていくことにする。

#### 四 『八宗綱要ノート』と円了の仏教・哲学一致論

ここでは、第一の諸法原理と、第九の四門入理をとりあげ、本書と円了の仏教・哲学一致論との關係を検討する。

##### (一) 諸法原理

「諸法原理」は、世界成立の原理について、一、俱舍宗、二、法相宗、三、華嚴宗および天台宗という三つの考え方の違いを記す。すなわち一、俱舍宗（俱舍論）は、世界が要素の離合集散によるという考え方である。二、法相宗（唯識論）は、阿頼耶識の種子から世界が成立すると説く考え方である。三、華嚴宗および天台宗では、真如縁起と立てて、真如の活動により世界が成立すると説く考え方である。円了は、明治一九年（一八八六

年) 一二月刊行の『真理金針』「続編」では、この三つの考え方を西洋哲学の唯物論、唯心論、唯理論と対応させ、仏教・哲学一致論を構築する<sup>1)</sup>。よってこの項目は仏教・哲学一致論の前提となるものである。

## (二) 四門入理

円了の仏教・哲学一致論の仏教宗派は、最初は四つ(俱舎宗、法相宗、華嚴宗、天台宗)であったが、明治二〇年(一八八七年)一月刊行の『真理金針』「続々編」になると成実宗と三論宗とが加わり、六宗に拡大する<sup>12)</sup>。そして、それらを②經宗(經典に基づく宗派)、論宗(論書に基づく宗派)の区別、③大乘小乗の別、④⑤空有の別、そして⑥西洋哲学との対応を述べる。これを表にすると次のようになる。

〈表二〉

① 仏教宗派	② 經宗論宗		③ 大小乗		④ 空有		⑤ 空有		⑥ 西洋哲学	
俱舍宗	論宗		小乗		有		有		唯物論	
成実宗			大乘				空		唯物論から唯心論への階梯	
法相宗	經宗	空		中道		有		唯心論		
三論宗		空				有		唯心論から中道へ入る階梯		
華嚴宗	經宗		大乘		中道		非有非空		唯理論	
天台宗							亦有亦空		亦有亦空	

この中、④と⑤は空有について、二つの分け方をしている。④空有にある有、空、中道は天台教学の三諦である



ことがわかるが、筆者は⑤にある有、空、亦有亦空、非有非空の由来はわからなかった。ところが、これが本書に説かれる四門入理の教理だったのである。四門入理の内容は次のようなものである<sup>13)</sup>。

仏教の教説を見ると、有と説くこともあれば、空と説くこともある。小乗においては俱舎論<sup>くしやろん</sup>では法体恒有<sup>ほつたいじやう</sup>と説き、成実論<sup>せいじつろん</sup>では人法二空と説く。また大乘においては法相宗では空有の中道を立てるが依他起性<sup>えたきしょう</sup>、円成実性の法体を有と説き、三論宗では無所得の空を立てる。これらはみな異なっているように見えるが、最終的には一致する。このことを説明する理論に四門入理がある。四門とは有、空、亦有亦空、非有非空である。衆生の能力は人それぞれであるから、有を聞いて真理に入る人もいれば、空を聞いて真理に入る人もいる。故に、真理に入る門には四種類あるが、真理に入ってしまったえば同じである。ただ大事なのは有や空に執着しないことである。

最初にある俱舎<sup>くしや</sup>が有、成実<sup>せいじつ</sup>が空、法相<sup>ほふさう</sup>が有、三論<sup>さんろん</sup>が空という教説が、円了<sup>えんりやう</sup>の図表<sup>ずへい</sup>の⑤の項目にあてはまることがわかる。そもそもこの四門入理とは天台宗の教理であり、化法<sup>けはう</sup>の四教<sup>しよきやう</sup>（藏教、通教、別教、円教）の中にそれぞれ四門が備わっていることを説くものである<sup>14)</sup>。これを本書では天台宗の教理として扱うのではなく、一般化した仏教総論として扱っていることが特徴的である。

以上、本書の内容に、円了の仏教・哲学一致論の前提となる思想要素が含まれていることを確認した。続いて、これらの教説の淵源である吉谷覺寿との関連を検討する

## 五 吉谷覺寿との関連

吉谷覺寿は真宗大谷派の僧侶で、天保一四年（一八四三年）に現在の岐阜県で生まれた。京都の東本願寺高倉学寮で学んだ後、東京大学講師、東京大谷教校講師などを経て明治四四年（一九一一年）真宗大谷大学（現大谷

大学)の教授となる。著作には、後述する『仏教大旨』、『仏教総論』、『明治諸宗綱要』など仏教全体に関する著作のほか、『三帖和讃講述』、『六要鈔講讃』など真宗関係の著作がある。

吉谷は明治十四年から二十三年まで東京大学で仏教学の講義を行なった。吉谷が講義を行うに至った経緯は次のようなものである(15)。東京大学総理であった加藤弘之(一八三六—一九一六)が、東京大学に仏教学の講義を設けるにあたり、島地黙雷(一八三八—一九一二)の推薦により、まず曹洞宗の原坦山(一八一九—一八九二)を招聘した。ところが、加藤と知己であった真宗大谷派・念速寺(16)の近藤という僧侶が原坦山について「禅門の悟道の方にて教相学者にあらず。殊に天台学などは全く学びたることなき人」と述べ、それゆえもう一人、教理専門の学者を招聘するのがよいと進言し、近藤氏の紹介で吉谷覺寿が講師となったという。教理を期待された吉谷は、東京大学で『八宗綱要』、『天台四教儀』の講義を行った。前述したように、円了も吉谷の『八宗綱要』の講義を受講していることから、本書が吉谷の思想とかわりを持つことが推測される。

そこで吉谷の初期の著作である『仏教大旨』(明治一九年)、『仏教総論』(明治二十三年)と本書とを比べてみると、共通する部分が多く、それらの多くは、本書の記述を増稿した形となっている。このことから、本書の内容が吉谷の講義か、あるいは吉谷の手控えを書写した筆録であることは、ほぼ間違いないであろう。

明治一九年刊行の『仏教大旨』序文には刊行の由来が次のように説かれている(17)。仏教は幽玄広博であり、容易にその旨趣を知るのは難しい。もともと各宗の宗義の中で継承されてきた経論章疏は膨大であるが、その解説は、あるものは煩雑であり、あるものは簡略に過ぎる。また師匠から直接教えを受けないとわからないものもある。ゆえに仏教新学の人々が容易に仏教のポイントを知ることができる書物は少ない。そこで自分は諸宗の典籍を読んでそのポイントを記録した。これはかつて『令知会雑誌』に掲載したものである。しかし、その雑誌は

会員にしか配布されないために、広く世間には行き渡らない。ところが最近、仏書出版社の阿部氏が雑誌の中の記事を収集して別冊とし、刊行することを願ってきた。よって最近、抜き出しを行い、煩雑な部分を削り、足りないところを補い、訂正を加えて一書にした、というものである。

さらに明治二三年の『仏教総論』の序文をみると<sup>19</sup>、吉谷は『仏教大旨』の内容に満足しない部分があり、その内容を拡張して項目を増補し、十五章からなる書物にしたという。さらにこの書は同じ明治二三年六月に刊行した『明治諸宗綱要』と対になる著作である。『仏教総論』は仏教の総論であり、『明治諸宗綱要』は各論である。ゆえに仏教全体の要旨と、日本にある各宗の法義を知ろうとすれば、この二つの書物を一読するのがよいと記している。そして、最後に、吉谷が明治十四年から二十三年までのほぼ十年間、東京大学・帝国大学で仏教を印度哲学として講義していた内容も盛り込んだものであるという。

これから考えると、吉谷の仏教全体に関する著述は、①『令知会雑誌』の連載、②『仏教大旨』、③『仏教総論』の順に発展したものであることがわかる。

続いて本書と吉谷の思想との関係を具体的に証明するために、一つの主題をとりあげて本書と『仏教大旨』とを対照させる。本来ならば『令知会雑誌』との対照ができればよかったのであるが、都合により『仏教大旨』をとりあげるにした。

『仏教大旨』は最初に仏教の大旨を、「迷いを転じて悟りを開くこと（転迷開悟）」と定義する。そして、それに関連する教説を十門にわたり展開する。それは、一、迷悟体性、二、諸法原理、三、正因正果、四、仏性名義、五、空理涅槃、六、三界唯心、七、宗教分派、八、真俗二諦、九、三法印義、十、総決料簡である。前に見た本書の中の『八宗綱要』と関連しない六項目と、『仏教大旨』の項目名とを対照すると、次のようになる。

〈表三〉

円了『八宗綱要ノート』		吉谷『仏教大旨』
第一 諸法原理	一、迷悟体性	
第二 三法印義	二、諸法原理	
第九 四門入理	三、正因正果	
第十 善惡業感	四、仏性名義	
第十一 教学關係	五、空理涅槃	
第十二 仏教宗派	六、三界唯心	
	七、宗教分派	
	八、真俗二諦	
	九、三法印義	
	十、總決料簡	

すなわち円了の「第一 諸法原理」は吉谷の「二、諸法原理」、円了の「第二 三法印義」は吉谷の「九、三法印義」、円了の「第九 四門入理」は吉谷の「七、宗教分派」の後半部分に、円了の「第十 善惡業感」の一部が吉谷の「三、正因正果」の一部に、円了の「第十二 仏教宗派」が吉谷の「宗教分派」の前半部分に対応する。続いて具体例として、「諸法原理」を対照させる。〈表四〉は冒頭部分である。

〈表四〉

<p>井上円了『八宗綱要ノート』（二丁オモテ）</p>	<p>吉谷『仏教大旨』（二頁〜四頁）</p>
<p>第一題 諸法原理</p> <p>凡ソ森羅ノ諸法ハ、有形無形有情非情等ノ差別アリト雖モ、其起ル所ノ同一ノ原理ナクンハアルヘカラス、</p> <p>固ヨリ仏教ハ衆生ノ性欲ニ応シテ説キタルモノナレハ、オノヅカラ差異アルヤ必セリ、然レトモ其原理ハ同一ナルコトヲ知ルヘシ、</p> <p>其仏教所談ノ諸法ノ原理トハ、唯真如ノ一理ナリ、此理タルヤ、万物中ニ周遍シテ之ヲ含有シ、而モ諸法ノ体性ナルカ故ニ法性トモ云フ、</p> <p>然レトモ色モナク形モナク更ニ名状スベカラス、唯是レ無漏智ノ所証タルモノナリ、</p>	<p>第二 諸法原理</p> <p>問云、忽チミレハ迷悟染浄ノ諸法、霄壤ノ如ク懸隔セリ、然ルニ其原理ハ同ナルヤ、異ナリヤ、</p> <p>答云、諸法ノ本源ヲ推覈スルニ、儒教ハ太極ヲ以テ本トシ、道教ハ大道ヲ以テ本トシ、耶蘇教ハ耶和華ヲ以テ本トス、軌近盛リニ行ハルル西洋ノ哲学ニモ古今、数派アリトイヘトモ、目今ハ哲学論旨中、百家其異説ノ同帰スルトコロノ一理ヲ発見令メ、徒ラニ孤行ノ学派ニ偏倚スルノ弊ナカラシムルヲ以テ目的トス、</p> <p>固ヨリ仏教ハ衆生ノ性欲ニ応シテ施ストコロノ法門ナレハ、自爾トシテ差異アルヤ必セリ、故ニ彼等ト同一ニ論スヘカラス、然レトモ其總括スルトコロノ本源ハ唯一理ヨリ出ルト云フコトヲ論究セスンハアルヘカラス、</p> <p>彼哲學家ニ於テモ万物ノ原理ヲ論スルニ方リ、宗教ト科学トハ外貌ヨリミレハ大ニ反対シテ互ニ是非シ争論ノ絶サルコトナレトモ、若其原理ノ同一ナルヲ知ラハ、金表銀裏ノ楯ノ如ク、宗教ト科学ト和合シテ、遂ニ一致ニ帰スヘシ、其同一ノ原理トハ、最モ形而上ノ一大誠実ニシテ天地万物ノ中ニ含有スル物コレナリト云々、</p> <p>今仏教所談ノ諸法ノ原理ハ如何ト云ニ、唯真如ノ一理ナリ、此真如タルヤ、有漏無漏有情非情等ノ諸法ノ体性トナルカ故ニ、之を法性ト云、</p> <p>大乘義章二「法之体性故云法性」トアリ、</p>

円了では、森羅の諸法の生起に同一の原理があるべきということから始めるが、吉谷では問答形式になっている。答えでは最初に原理について、儒教では太極、道教では大道、キリスト教ではエホバを原理とすると述べ、続く部分は、ほぼ同じ趣旨である。

続いて各論に入る（表五）。円了は諸法原理に三種あることを述べた後に俱舍宗の原理を述べる。吉谷は大乗、小乗の区別を述べた後に毘曇（俱舍宗）の原理を述べる。

（表五）

井上円了『八宗綱要ノート』（二丁ウラ）	吉谷『仏教大旨』（二四頁）
<p>然ルニ此諸法ノ原理ヲ委ク談スルニ大途三種アリ、 一二俱舍論ニ於テハ、三世実有法体恒有ト立テテ、 三世ニワタリテ諸法ハ実体アリ、 因縁合スレハ作用ヲ起シ、 因縁散スレハ作用ヲ滅スルト立ツル、</p>	<p>抑此諸法ノ原理ヲ論スルニ大小乗ノ別アリ、小乗ノ中、 且ク有門毘曇ニ於テハ三世実有法体恒有ト立テテ、真理ヲ 以テハ諸法ノ本源ト云ハス、 有漏無漏、色心等ノ諸法ハ其体実有ニシテ、 因縁和合スレハ未来ヨリ現在ニ流至シテ作用ヲ起シ、 因縁離散スレハ作用ヲ滅シテ過去ニ落謝スルノミナリト 云々、 委クハ婆娑俱舍等ニ明スカ如シ、</p>

両者がほぼ同じ内容であり、吉谷が少し増稿されていることがわかる。

続いて唯識の部分を見る（表六）。円了は唯識論という書名を挙げて論じるが、吉谷は大乗に頼耶縁起と真如縁起とがあることを述べた上で頼耶縁起を述べる。

〈表六〉

井上円了『八宗綱要ノート』（二丁ウラ〜三丁オモテ）	吉谷『仏教大旨』（二四頁〜一五頁）
<p>二ニ唯識論ニ於テハ、頼耶縁起ト立テテ、真如ノ理ハ諸法ノ体性トナルノミニシテ、諸法ヲ生スルモノニアラス、有情非情等ノ諸法ハ、頼耶ノ種子ヨリ生ス、</p> <p>頼耶トハ梵語ニテ具ニハ阿頼耶、此ニ藏ト翻ス、是レハ有情ノ心ニ八種アル中、第八識ナリ、</p> <p>此識ノ中ニ一切万法ノ種子ヲ撰藏セリ、</p>	<p>次ニ大乘ノ中ニ途アリ、云ク頼耶縁起、真如縁起コレナリ、此ニ途何レモ真如ヲ以テ諸法ノ本源トスレトモ、法門ノ建立各別ナリ、</p> <p>初ニ頼耶縁起トハ、深密瑜伽ノ説、唯識法相ノ義ニテ、其所立ハ、真如凝然不作諸法ト立テテ、真如ハ諸法ノ体性トナルノミ、真如ハ無為法ナレハ随縁シテ有為ノ諸法トナルモノニハ非ス、有情非情等ノ諸法ハ、頼耶ノ種子ヨリ生ス、頼耶トハ梵語ニテ具サニハ阿頼耶ト云、唐ニハ藏ト翻ス、コレハ有情ノ心識ニ八種ヲ立ル中、第八識ナリ、之ヲ藏識ト名ルハ、藏トハ撰藏ノ義ニテ（具ニハ能藏、所藏、執藏ノ三義アリ）</p> <p>第八識ノ中ニハアラユル有漏無漏善惡依正等ノ種子ヲ含藏セリ、</p> <p>此種子ニ本有種子アリ、新熏種子アリ、故ニ唯本種生ノ法アリ、本新合起ノ法アリ、凡ソ有為法ノ生スルヤ、必ス因縁和合シテ此頼耶ノ種子ヨリ現行ス、喩ヘハ、草木ノ種子ノ雨露水土ノ縁ニ藉リテ芽莖ヲ発生スルカ如シ、</p> <p>故ニ凡聖迷悟、森羅万像、悉ク此種子ヨリ生起セサルハナシ、</p> <p>故ニ真如ノ理ヲ体性トシテ頼耶ノ種子ヲ以テ諸法ヲ生スル親因縁ノ種子ト立ツルナリ</p>

内容はほぼ同じであるが、吉谷のほうが細かくなっているがわかる。

第三に華嚴、天台の真如縁起である（〈表七〉）。

〈表七〉

井上円了『八宗綱要ノート』（三才オモテ）	吉谷『仏教大旨』（二五頁〜一七頁）
<p>三ニ華嚴天台ニ於テハ、</p> <p>真如縁起ト談シテ、真如拳体随縁シテ差別ノ諸法ト顯ハル、然ルニ縁起ノ諸法即チ真如ナリ、譬ヘハ海水ノ風ニヨリテ波動スルニ、波動ノ当体即水ナルカ如シ、</p> <p>故ニ此真如ニハ随縁ト不変トノ二義アリ、随縁ノ義ヨリ云ハハ、真如ノ拳体随縁シテ万法トナル、仏陀モ衆生モ真如ヨリ生セサルハナシ、</p> <p>又不変ノ義ヨリ云ハハ、一切諸法即真如ナリ、一色一香トシテ真如妙理ナラサルハナシ、</p> <p>勝鬘經ニ自性清浄心不染而染トハ真如随縁シテ諸法トナルコトヲ明ス、染而不染トハ随縁シテ諸法トナルトキ、真如ノ自性失セサルコトヲ示ス、之ヲ真如縁起ト云フナリ、</p>	<p>次ニ真如縁起トハ、楞伽、勝鬘、起信、宝性等ノ諸経論ノ説、華嚴天台等所談ノ義ナリ、</p> <p>然ルニ起信論ヲ華嚴ヨリハ五教中ノ終教ノ位トシ、天台ヨリハ四教ノ中ノ別教ノ位トスト云ヘトモ、朋党ノ情ヲ離レテ之ヲ見レハ、偏ニ一教ニ属スヘカラス、何ヲ以ノ故ニ、大乘通申ノ論ナルカユヘナリ、</p> <p>又此真如縁起ニ付キ、天台ト華嚴トノ所談ニ於テ差異ナキニ非ス、華嚴ニハ性起ヲ談シ、天台ニハ性具ヲ談ス、此性起ト性具トノ論点ヨリイヘハ、起信ハ華嚴ニ同スルナリ、此等ノ義ハ、今ノ急要ニ非サレハ之ヲ他日ニ譲リテ、今正ク真如縁起ノ相ヲ略陳スヘシ、</p> <p>凡ソ諸法縁起ノ相ヲ明スニ、真如随縁不守自性ト談シテ、真如ノ拳体随縁シテ染浄ノ諸法ト顯ルルコトハ、</p> <p>譬ヘハ海水ノ風ニ因リテ波浪ヲ発スニ同ジ、其縁起ノ諸法ノ当体即真如ナルコトハ、恰モ波浪ノ当体即水ナルカ如シ、</p> <p>故ニ此真如ニハ随縁ト不変トノ二義アリ、随縁ノ義ヨリ云ハハ、真如ノ拳体随縁シテ十界差別ノ諸法トナル、仏陀モ衆生モ、一トシテ真如ヨリ生セサル者アルコトナシ、</p> <p>又不変ノ義ヨリ云ヘハ、森羅ノ諸法、即真如ニシテ、青々タル翠竹、鬱々タル黄花、宛然トシテ真如ノ妙理ナラサルハナシ、</p> <p>勝鬘經ノ中ニ自性清浄心不染而染トハ真如随縁シテ諸法トナルコトヲ明ス、染而不染トハ随縁シテ諸法トナル時、真如ノ自性ヲ失セサルコトヲ示シタマフ、</p>



吉谷は最初に真如縁起を説く経論と、『大乘起信論』の所属についての議論を行っていることが異なるが、内容はほぼ同じで、吉谷のほうが細かくなっていることがわかる。

以上、一例ではあるが、円了『八宗綱要ノート』を増稿して『仏教大旨』ができていることを確認した。ここで両者の関係を時系列で推測してみる。明治一八年、東京大学の研究生であった円了は本書『八宗綱要ノート』を作成した。円了は明治一六年吉谷の講義を聴講していることから、この内容は吉谷自身の思想である可能性が高い。その中でも諸法原理などの項目は凝然の『八宗綱要』には説かれていないものであり、吉谷自身が仏教の根本原理と考えたものであった。それらはおそらくキリスト教や西洋哲学と同様、世界発生の原理が仏教にもあるべきという、思想的要請から構想されたものと考えられる。

吉谷は、おそらくこの時期に『令知会雑誌』に同様の内容を連載し、それを増稿して明治一九年に『仏教大旨』を刊行した。さらにそれを拡充して明治二三年に『仏教総論』を刊行したのであった。一方、円了は『八宗綱要ノート』の教説、とくに諸法原理の項目にヒントを得て仏教・哲学一致論を構想し、それを明治一九年の『真理金針』『統編』、明治二〇年の『仏教活論序論』に発表していった。

## 六 ままとめと課題

まず小論の内容をまとめる。明治初期の仏教界は、内的には神道、外的にはキリスト教の圧力に押されていた。ここで必要なのは、宗派としてではなく総合的な仏教というものを、どのように打ち出すかであった。そこで鎌倉時代の凝然『八宗綱要』が注目された。『八宗綱要』は、仏教の総説から始めて日本仏教の宗派にまで及ぶ見取り図が示されている。仏教界では、初等教育でこれを教授することにより、仏教そのものと宗派との連結

を教育し、さらに当時の日本仏教の宗派を、その枠組みで説明することも行なった。

大谷派僧侶、吉谷覺寿は、教理に関する知識を評価されて明治十四年に東京大学の講師となり、『八宗綱要』、『天台四教儀』を講じた。とくに『八宗綱要』を講義するにあたっては、『八宗綱要』には出ないが吉谷自身が考える仏教の根本教理（諸法原理、三法印など）を併せて講義していた。吉谷はこの内容を『令知会雑誌』に連載し、それを整理して明治一九年には『仏教大旨』を、明治二三年には『仏教総論』を刊行した。井上円了は明治一六年に吉谷の講義を受講した。のちその内容を本書にまとめた。そして円了は吉谷が説いた「諸法原理」をもとに仏教・哲学一致論を形成したのであった。

明治初期の東京大学の仏教学の講義としては、従来、原坦山の『大乘起信論』の講義が注意されてきたが、今後は吉谷の教説、およびそれが円了に与えた影響についても研究していかなければならないであろう。筆者の次の課題としては、吉谷の仏教思想を、『仏教大旨』、『仏教総論』、『明治諸宗綱要』などをもとに考察することである。特に『明治諸宗綱要』において吉谷は、名前こそ挙げないが、円了が推進した仏教・哲学一致論を強く批判している<sup>(19)</sup>。この点を含め、吉谷の仏教思想を解明した上で、円了との違いを考察することにより、円了の思想的位置づけが、より明らかになると期待される。

〔付記〕本論文の執筆にあたり、資料を提供していただいた東洋大学附属図書館に感謝申し上げます。また東洋大学井上円了記念学術センターの三浦節夫教授より有益な情報をご教示いただきました。末筆ながらここに記して感謝申し上げます。

【資料編】翻刻『八宗綱要』

〔凡例〕

- ・漢字は常用漢字で統一した。
- ・「コト」、「ナリ」などを示す略字は、それぞれ「コト」、「ナリ」と表記した。
- ・文字の誤記を指示しているものは、訂正したもののみを記した。
- ・改行箇所には／を入れた。
- ・読みやすさを考慮して、筆者が句点を入れた。
- ・判読できなかった文字は□を記した。

（表紙）

井上円了『八宗綱要』

文学部研究生 井上円了

（表紙見返し）

明三慧著

諸宗祖師略伝

（一丁オモテ）※記載なし

（二丁ウラ）※記載なし

(二丁オモテ)

第一題 諸法原理

凡ソ森羅ノ諸法ハ、有形無形有情非情等ノ差別／アリト雖モ、其起ル所ノ同一ノ原理ナクンハアルヘカラス、固／ヨリ仏教ハ衆生ノ性欲ニ応シテ説キタルモノナレハ、オノヅカラ／差異アルヤ必セリ、然レトモ其原理ハ同一ナルコトヲ知ルヘシ、其／仏教所談ノ諸法ノ原理トハ、唯真如ノ一理ナリ、此理／タルヤ、万物中ニ周遍シテ之ヲ含有シ、而モ諸法ノ／体性ナルカ故ニ法性トモ云フ、然レトモ色モナク形モナク更／ニ名状スベカラス、唯是レ無漏智ノ所証タルモノナリ、／

(二丁ウラ)

然ルニ此諸法ノ原理ヲ委ク談スルニ大途三種アリ、／一ニ俱舍論ニ於テハ、三世実有法体恒有ト立テテ／三世ニワタリテ諸法ハ実体アリ、因縁合スレハ作用ヲ／起シ、因縁散スレハ作用ヲ滅スルト立ツル、二ニ唯識／論ニ於テハ、頼耶縁起ト立テテ、真如ノ理ハ諸法ノ／体性トナルノミニシテ、諸法ヲ生スルモノニアラス、有情非／情等ノ諸法ハ、頼耶ノ種子ヨリ生ス、頼耶トハ／梵語ニテ具ニハ阿頼耶、此ニ藏ト翻ス、是レハ有／情ノ心ニ八種アル中、第八識ナリ、此識ノ中ニ一切／万法ノ種子ヲ撰藏セリ、故ニ森羅万象／

(三丁オモテ)

悉ク此頼耶ノ種子ヨリ生起スト立ツルナリ、／三ニ華嚴天台ニ於テハ、真如縁起ト談シテ、真如拳／体隨縁シテ差別ノ諸法ト顯ハル、然ルニ縁起／ノ諸法即チ真如ナリ、譬ヘハ海水ノ風ニヨリテ波動／スルニ、波動ノ当体即水ナルカ如シ、故ニ此真如ニハ隨／縁ト不變トノ二義アリ、隨縁ノ義ヨリ云ハハ、真如／ノ拳体隨縁シテ万法トナル、仏陀モ衆生モ真如ヨリ生セサルハナシ、又不變ノ義ヨリ云ハハ、一切諸法即／真如ナリ、一色一香トシテ真如妙理ナラサルハナシ、／勝鬘經ニ自性清淨心不染而染トハ真如隨縁／

(三丁ウラ)

シテ諸法トナルコトヲ明ス、染而不染トハ随縁シテ諸ノ法トナルトキ、真如ノ自性失セサルコトヲ示ス、之ヲ真如縁ノ起ト云フナリ、ノ起信論ノ一心二門ハ、真如ノ随縁ト不変トニ分ルルノヲ云フナリノ随縁真如ハ心生滅門ナリノ不変真如ハ心不生滅門ナリノ道理ト真理トハ別ナルモノニアラス、深淺ニ從フテ次第ノアリ、道理ヲ究メテ始メテ諸法ノ道理ナル真ノ如ノ真理ヲ知ルヘシ、ノ

(四丁オモテ)

真如ヲハ如何ナルモノト人間ハハ、墨絵ニカキシ松風ノノ音ノ真如トハ、真ハ真実、如ハ如常ヲ義トス、真如ニハノ一如、法界、法性、不変異性、平等性、法位真ノ際等種々ノ異名アリノ天台ノ止觀ニノ一色一香無非中道トアリノ随眠トハ煩惱ノ異名ニシテ、其中ニ見思ノ二惑ヲノ撰スルナリ、随ハ煩惱ノ常ニ身ニ随フヲ云ヒ、眠トハノ常ニ眠リテ存シ物ニ触ルレハ忽チ起ルコトアルヘシノ

(四丁ウラ)

第二題 三法印義

抑く仏教ハ無量ナレハ、相濫モ亦多カルヘシ、故ニ其真偽ヲ識別ノスルノ標準ナクンハアルヘカラス、因是三種ノ法印アリ、一ニ諸ノ行無常印、二ニ諸法無我印、三ニ涅槃寂靜印ナリ、ノ此三印ニ応スルヲ佛教トシ、此三印ニカナハサルヲ非佛教トスルナリ、一ニ諸行無常印トハ、有為法ノ共相ナリ、ノ共相トハ諸法ニ貫通スルノ義ナリ、諸行トハ、諸トハ一切ノ義、行トハ造作遷流ノ義ニシテ、スベテ因縁合成シテ転ノ變ヲ有スル情非情等ノ法ナリ、無常トハ生滅ヲ有ノスル法ハ常住ナルモノナシ、智度論ニハ此無常ニ二ノ

(五丁オモテ)

種ヲ分ツ、一ニ念念生滅之無常、是レハ草木等ノ非情ノハ勿論、有情ノ肉体及ヒ精神何レモ念念ニ生滅シテノ遷流無常ナリ、二ニ相續法壞ノ無常、是レハ生ノ命ヲ尽クルコトニシテ、生者必滅ノ理ナリ、然ルニ此生滅ヲ前ノ滅後生トモ云フテ、有為法ノ新陳代謝スル事ナリ、其前滅ノ後生ノ勢力速疾ナルニヨリ、前後相似相續スルカ故ニノ不變ノ物体アルカ如クニシテ知見スルコトヲ得ルハ、流水灯焰ノ如シ、然ルニ一切衆生、無常法ヲ顛倒シテ常住ト執スルカ故ニ、仏是カ為ニ無常ノ理ヲトケリ、之ヲ諸行無常ノ印ト云フナリ、二ニ諸法無我印トハ、一切ノ有為無為法ノ

(五丁ウラ)

ノ共相ナリ、上ノ有為ノ諸行ハ勿論、不生不滅ノ真理ノニ至ル迄、尽ク無我ナリ、凡ソ有情トハ、五蘊ノ和合シテ見聞等ノ左右ヲナスノミ、終日車ヲ數ヘテ車ナシト云フカ如ク、五蘊ノ体ヲハナレテ実我ナシ、仮我ハアリ、ノ若シ実我アラハ、身体モ衰滅セス病悩モ受ケスノ自在ナルヘシ、何ヲ以テノ故ニ、我トハ常一主宰ノ義ノナルカ故ナリ、然ルニ此理ナシ、況ンヤ山河草木家宅ノ等ニ於テオヤ、又無為ノ真理ノ如キハ不生不滅ノ法ニシテ、堅実ノ別体アルニアラス、故ニ無我ナルコト勿論ノナリ、然ルニ一切衆生堅実ノ我アリト執スルカユヘニ、ノ

(六丁オモテ)

仏是レカ為ニ無我ノ理ヲトケリ、之ヲ諸法無我印ト云フナリ、三ニ涅槃寂靜トハ、無為法ノ共相ナリ、ノ此涅槃ハ煩惱等ノ雜染ヲ滅尽シテ最極寂靜ノ安穩微妙ナリ、然ルニ此涅槃ニ付、大乘小乘ノ別アリテノ具サニ四種ノ涅槃アリ、次ノ法相宗ノ下ニ出ツル如シノ仏一代説教ノ本意ハ、此涅槃寂靜ノ証果ヲ得セシメンノカ為ナリ、之ヲ涅槃寂靜印ト云フナリノ有為ハ因縁ニヨリテ生起スルモノヲ云ヒ、無為ハ本来自然ニ存スルモノヲ云フノ念トハ時間ノ小隙ノ名ニシテ、刹那ノ積シタルモノナリ、ノ

(六丁ウラ)

第四 大小二乗

仏所説ノ一代教ノ中、大小乗ノ別アリ、乗トハ運載ノ義ノニテ、行人ヲ乗セテ因ヨリ果ニ運フコトナリ、即チ自利ノト利他トヲ具足シテ自他双運スルヲ大乘ト云ヒ、唯ノ自運ノミアリテ、他運ノ欠ケタルヲ小乗ト云フ、大乘ノ法トハ大人所乗ノ法ナリ、小乘法トハ小人所乗ノ法ナリ、大人トハ仏菩薩ナリ、小人トハ声聞緣覺ノ人ノナリ、故ニ小乘法ハ淺近ナリ、大乘法ハ深遠ナリ、故ニノ上乗下乗トモ名ク、其大人所乗ノ法トハ、布施等ノノ六度ノ行ナリ、小人所乗ノ法トハ、四諦十二因縁ノ

(七丁オモテ)

ナリ、具サニ云ハハ、教理行果ノ四法ト云フコトアリ、此外ノ仏教ヲ一乗ト三乗トニ分ツコトアリ、一切衆生皆成仏ノ理ヲ談スルヲ一乗教ト云ヒ、声聞ト緣覺ト菩薩ノトノ因果ヲ各別ニ談スルヲ三乗教ト云フナリ、又此ノ三乗ノ上ニ人天乗ヲ加ヘテ五乗ト云フコトアリノ

第五 三藏名義

三藏トハ経律論ナリ、是レハ仏一代ノ教法ヲ此三藏ニノ撰尽ス、一ニ経トハ梵ニシ多ラン訳シテ契経ト云フノ契トハ契当至合ノ義ニシテ、仏経ハ諸法ノ真義ニカナヒノ有情ノ様根ニ通スルガ故ニ契ト云フ、経トハ錦ヲ織ルニノ

(七丁ウラ)

縦糸ノ緯糸ヲ持ツ如ク、仏教ハヨク義理ヲタモチテノ散セサラシムルカ故ニ経ト云フノ二ニ律トハ、梵ニ毘那ヤノ此ニ訳シテ調伏ト云フ、有情ノ三業ヲ調和シ、諸ノ々ノ惡業ヲ制伏スルカ故ナリ、之ヲ律ト云フハ世間ノ法律ノ如ク、ヨク輕重ノ罰ヲ斷決スルカ故ナリ、三ニノ論トハ梵ニアビダツマ、訳シテ対法ト云フ、無漏ノ智ノ慧ヲ以テ四諦ノ理ヲ對觀シ、

涅槃ノ果ニ対向ス／ルコトナリ、之ヲ論ト云フハ、諸法ノ性相ヲ論議決／着スルノ義ナリ、其經律論ヲ各々藏ト名クル／ハ、此三八一切ノ文義ヲ撰藏シテ散失セサラシムル

(八丁オモテ)

カ故ナリ、此三藏ハ序ノ如ク定戒慧ノ三学ヲ詮顯／スルモノナリ、而モ大乘小乘共ニ此三藏アリ、／

## 第六 三学名義

三学トハ戒定慧ナリ、此三ハスベテ仏道修行ノ人ノ修／学スヘキ法ナリ、一ニ戒トハ、戒律ニシテ、有情ノ三業ノ非ヲ防／キ惡ヲ止ムルコトナリ、二ニ定トハ、散乱ヲ止メ心ヲ寂靜／ナラシムルコトナリ、三ニ慧トハ、愚痴ヲ対治シテ智慧ヲ／明瞭ナラシムルナリ、此三学ヲ成実論ニ、戒如捉賊、定／如縛賊、慧如殺賊、是レ始メニ戒ヲ持チテ三業ノ／可否ヲ制シ、次ニ定ニ入りテ心ヲ靜ニシ、後ニ慧ヲ／

(八丁ウラ)

起シテ煩惱ヲ斷ズルナリ、以上談スル所、所化ノ衆生ニ／約スル次第ナリ、若シ能化ノ仏ニ約スルトキハ、定戒慧／ノ次第ナリ、其故ハ、先ツ入定シテ衆生ノ様ヲカンガミ／次ニ戒律ヲトキテ威儀ヲトノヘシメ、後ニ心地ヲ／開キテ智慧ヲサツクルカ故ナリ、此三学ハ大小両乘／ニ通スルナリ／定ニハ靜慮ト云フ訳アリ／

## 第七 結集三藏

是レハ仏一代五十年間ハ唯、說法スルノミニテ、別ニ典籍ヲ／用井ズ、仏說ヲキキテ教ノ如ク修行シテ証益ヲエタリ、／(九丁オモテ)

然ルニ仏滅后、教法ノ散滅センコトヲ憂ヘテ、迦葉阿難／等ノ弟子一千人集マリテ、仏滅ノ年四月十五日ヨリ／九十日間ヲ經テ、摩竭陀國ノ王舍城ノ七葉巖ニ於テ、／經律論ノ三藏ヲ結集セリ、此仏入滅ノ年代ニハ／異說アリト雖モ、周□□



ノ説ニヨラハ周穆五十三ノ年ニ当ル、明治十八年マテハ二千八百三十四年ナリ、ノ尚ホ此三藏ヲ結集スルニツイテハ大小乗ノ不同アリ、ノ此結集ノ事ハ法苑珠林及ヒ義林章等ニノ諸書ヲ引キテ委ク釈セリノ

(九丁ウラ)

## 第八 仏教流伝

是レハ仏教ノ三藏結集セシヨリ、后代ニ流布ノ伝弘スル事ヲ云フ、印度ニアリテハ仏滅后一百年間ノハ迦葉阿難末田商那優婆毘多ノ五人ノ承継シテ伝持シ一味写瓶セリ、此五師ニツイテノ二十四祖ノ相承ヲ立ツルコトアリ(傳宗ナリ天)、一百年ノ以后、小乗中、諸部分出シ、異見派別スト雖モノ仏滅后四百年間ハスヘテ盛ナリ、五百年之時、外ノ道競ヒ起リテ仏教漸ク衰微セリ、次ニ六百年ノ之時、馬鳴論師アラハレテ大乘ヲ弘メ、七百年ノ之時、竜樹出テテ同シク大乘ヲ弘メ、九百年ノノ

(二〇丁オモテ)

時、無着世親ノ二大士アラハレテ唯識中道ノ法ノ門ヲ弘ム、千一百年ノ后、大乘中、空有二門ノ分レタリ、次ニ支那ニ於テハ、仏滅后一千十六年ノ即チ後漢ノ明帝永平十年、騰口竺蘭ノ二人始メテ仏經ヲ将来シテ、四十二章經等ヲノ翻訳セシ以来、唐宋ノ世々ニ至ル迄、仏教ヲ翻訳ノセシ三藏、凡ソ二百九十二人アリ、名義集并ニノ古今訳経図記等ヲ見ルヘシ、次ニ支那伝来以ノ後、三百余年ヲ経テ、百済国ニ伝フ、其後一百余年ヲ経テ我朝人皇三十代、欽明帝ノ御宇ノ

(二〇丁ウラ)

十三年十月、百済国ヨリ始メテ仏教ヲ伝ヘ、仏像ノ經論ヲ送遣セリ、然ルニ正ク仏教ノ盛ニ弘マリノ宗旨ヲ分チテ伝フルハ、三十四代推古天皇ノ御宇ノヲ始メトス、即チ推古帝ノ三十三年、高麗ノノ惠灌、三論宗ヲ伝ヘタリ、故ニ日本ノ仏教濫觴ノハ百済ヨリ来ル、次ニ欽明帝ノ十三年ヨリノ一百二年ヲ経テ第三十七代孝德帝ノ御宇、ノ白雉四年、道昭入唐シテ

玄奘三藏ヨリ／法相宗ヲ伝フ、即チ唐第三ノ王高宗帝ノ永徽／四年ニ当ル、夫ヨリ五十一代桓武天皇ノ朝ニ至／

(一一丁オモテ)

ル迄諸宗ヲ伝来セリ、是ヲ以テ本朝ニ仏教／ヲ伝来セシヨリ明治十八年ニテハ一千三百三十／四年ナリ、此仏教伝来ノ事ハ三国仏法伝通／縁起中ニ詳カナリ／

### 第三 仏教分齊

仏一代五十年間所説ノ法門無量ナレトモ、大途ヲ挙クレハ／八万四千ノ法門アリ、是レハ応病与藥ノ道理ニテ／所対治ノ衆生ノ煩惱ニ八万四千アル故ニ、能対治ノ教法／ヲ八万四千ノ法数ト名ケタル者也、八万四千ノ煩惱トハ／大数ニ約スル名称ニシテ、貪ト瞋ト痴トノ三毒／

(一二丁ウラ)

ノ煩惱ニ二万一千アリ、合シテ八万四千ト云フナリ／此八万四千ノ法数ハ大乘小乗ニ通ス、之ヲ細分スレハ／大乘中ニ顯教密教、頓教漸教等、別アリ／小乗中、声聞緣覺ノ教法アリ、／

### 第九 四門入理

凡ソ仏教ヲ通觀スルニ、或ハ有ト説クアリ、或ハ／空ト説クアリ、小乗中俱舍ニテハ法体恒有ト／説キ／成実ニテハ人法二空ト説キ、大乘ノ中、法相ニテハ空／有ノ中道ヲ立ツレトモ、依円ノ法体ヲ有ト説キ、／

(十二丁オモテ)

三論ニテハ無所得ノ空ヲ立ツルカ如シ、直チニ之ヲ見レハ／空有ノ別ヲナシテ氷炭相容レサルカ如クナレトモ、終ニ／一致ニ歸スルナリ、是ニ付、四門入理ト云フコトヲ知ルヘシ、／四門トハ有門、空門、亦有亦空門、非有非空門トナリ、／有情ノ機根ハ区々ナルカ故ニ、有ヲ聞キテ真理ニ入ルモノアリ、／空ヲ聞キテ真理ニ入ルモノアリ、又真理ハ真善妙有／

ノ第一義空ノ徳アレハ、偏執スヘカラスト觀シテ悟ルモノ／アリ、又真理ハ言詮ヲ離レテ思慮ヲ離レテ、有トモ／空トモ唯、是レ内証智ノ境界ナリト觀シテ悟ル／モノアリ、故ニ通入ノ門ニハ四種アレトモ、真理ヲ見ルニ／

(十二丁ウラ)

至リテハ同一ナリ、古説ニ「ワケノボル麓ノ道ハ多ケ／レトモ同シ高嶺ノ月ヲミルカナ」修行ノ道ハ／多途アレトモ、仏果ノ高山ニ登リテ法性真如ノ／月ヲ見ルニ至リテハ、更ニ異ナルコトナシ、唯、空有等ノ／諸門ニ於テ執スレハ、理ヲ証セズ、着セサレハ皆真ノ理ニ入ルナリ、故ニ仏教ニハ偏執ヲ離レテ、各自ノ／性欲ニ応シテ修シ入ルヲ要トスルナリ、／

第十 善惡業感

情く案スルニ、宇宙間ノ有情ノ種類、無量ナレトモ／飛禽走獸等ヲサシオキテ姑ラク人類ニツイテ／

(十三丁オモテ)

論セハ、凡ソ社会ノ状態ヲ見ルニ、上下貴賤賢愚貧／富ノ別アルハ何ソヤ、曰ク、善惡ノ業ヲ原因トシ結／果ヲ感セシニ外ナラサルナリ、此因果ノ理法ハ仏陀／人天ノ造作セシモノニアラス、所謂自業自得ノ道ノ理ニテ、之ヲ已作不失、未作不得ト云フ、已作不失トハ／已ニ善惡ノ業ヲ作りシモノハ必ス善惡ノ果ヲ感ス／ルコトナリ、未作不得トハ、未タ善惡ノ因ヲ作ラサルモノハ／必ス善惡ノ報ヲ得サルコトナリ、抑／此ノ人類ノ果ヲ／ウルニハ総報業、別報業ノ別アリ、総報業トハ／総報ノ果体ヲ感スル業也、此時ハ帝王ト凡人／

(十三丁ウラ)

トノ別アルコトナシ、次ニ別報業トハ、別報ノ果体ヲ感スル／業ナリ、此時ハ智愚好醜ノ別アリ、此総別二果／ハ相離レタルモノニアラス、総報ノ果体ノ上ニ別報ノ／果ヲ感得ス、喩ハ画師ノ鼻目等ノ総相ヲ／エカキテ其上ニ種々填彩スルカ如シ、問テ云ク、善／惡業感ノ義ハ一往然ルヘシト雖モ、尚ホ疑アリ／其故ハ現ニ社会ヲ目撃スルニ有道慈善ナ／ルモ不

幸ニシテ幸（？）ニカカリ、或ハ短命ナルモノアリ／又暴行不仁ナルモ榮利長寿ナルモノアリ、彼ノ顔回／ト盜跖トノ如シ、是レ因果ノ理法ニカナハサルニ似タリ／

#### （十四丁オモテ）

如何、答テ曰ク、此ニ於テ過現未ノ三世ニ亘リテ／因果ノ正理ノ空シカラサルコトヲ知ルヘシ、即チ受報ノ位ニツイテ四業ヲ立ツルコトアリ、一ニ順現受業／曰ク、此生ニ業ヲ作りテ現生ニ果ヲ受クル是ノナリ、二ニ順生受業、此生ニ業ヲ作り、次生ニ果ヲ感スル是ナリ、三ニ順后受業、此生ニ業ヲ作り／生ヲ越エテ第三生ニ果ヲ受クル是ナリ、四に順ノ不定受業、受報時不定ナル是ナリ、故ニ／今世ニ善行ノモノニシテ惡果ヲ受クルハ過去生ノ造業ノ因ノ酬報セルモノナリ、又業惡ノモノニシテ善／

#### （十四丁ウラ）

果ヲ得ルモ亦然リ、此ノ如ク、三世ニ通シテ因果ノ理法ヲ諦觀スルニ、毫モ疑ナシ、何ヲ以テ天ノ道ノ是非ヲ尤ムルヲ要センヤ、尚ホ此善惡業感ノ理ハ瑜伽論、雜集論、唯識論、俱舍論ノ等ニ明シテアリ／

### 第十一 教学關係

夫レ宗教ト學術ヲ大別スレハ、信仰ト究理トノ別アリ、／然ルニ細論スレハ、互ニ關係ナキ能ハス、學術ヲ以テ物理ノ尋釈研究シテ其確實ナルヲ知レハ、直チニ見聞ノセサルモ其理ノ妄ナラサルヲ□スルニ至ル、疑團氷／

#### （十五丁オモテ）

解ト云フモノ即チ真ナリ、又宗教ニハ種々アル中、／仏教ノ如キハ信ヲ以テ入門トスレトモ、単ニ學術究ノ理ヲハナレテ事理ノ何物タルヲ知ラスシテ妄信スルニハ／アラス、固ヨリ學問ニヨリテ事物ノ諸法ヲ詳ニセサレハ／信スルコト不能、故ニ小乘ニハ五位七十五法、大乘ニハ／百法ヲ立テテ、有為無為、色心内外等ノ事理ノ諸法ノ明瞭ニスル所ナリ、是ニ

付、仏教ノ中、信ニ二種ヲ／分ツ、一ニ信解ノ信、是レハ明ニ真理ヲシテ心ニ／疑慮ナキヲ云フ、二ニ深信ノ信、是レハ長者ノ言ヲ／信スルカ如シ大日経ノ義、經中ニアリ、此深信ノ信ノ如キハ、自ラ理ヲ／

(十五丁ウラ)

究メスト雖モ、他ノ識者ノ言ニツイテ之ヲ信スルカ故ニ、其本／源ヨリ言ヘハ是亦學術究理ノ結果ナリ、／

## 第十二 仏教宗派

凡ソ仏教ノ宗派ノ分レタル所以ハ、一途ノ仏説ヲ凡人ノ／誤解セシヨリ生セシニアラス、隨器開道授与教法ノニシテ、固ヨリ一仏ノ説法ノ上ニ差別アリ、故ニ諸教ノ中／各自ノ有縁ノ法ヲ根拠トシテ開宗スルカ故ニ、義トシテ／宗派ノ別ヲ生セサルヲエサルナリ、是ヲ以テ印度ニ／於テハ小乗ハ二十部ト分レ、大乘ハ瑜伽中論ノ二／宗ト分レタルノミ（瑜伽ハ法相、中論ハ三論）支那ニ於テハ十三宗ト／

(十六丁オモテ)

分レ、日本ニ来リテハ聖武帝ノ御宇、俱舎成実律／法相三論天台華嚴真言ノ八宗ヲ弘通シ、／其後禪浄土ノ二宗ヲ弘通セリ、之ヲ八宗十宗ト／云フ、然ルニ古今ニ亘リ法運ノ通塞アリ存亡／興廢一准ナラス、前ノ十宗ト現時流布ノ宗教ト／比較スルニ増減アリ、即チ十宗中、現存セルモノハ法／相天台真言禪浄土門ノ五宗ノミ、後ニ増セルモノハ／日蓮ト時宗ト融通念仏宗トナリ、然ルニ現今ハ／禪宗ノ総名ヲ称ヘス、直チニ臨濟曹洞黃檗ノ三宗トス、亦浄土宗ト真宗トヲ別ニセリ、是ヲ以テ明治／

(十六丁ウラ)

十六年ノ調ニヨルニ、天台、真言、浄土、臨濟、曹洞、黃／檗、真宗、日蓮、時宗、融通念仏宗、法相ノ十一／宗ナリ、此中、天台宗ノ下ニ寺門、真盛ノ両／派アリ、真言宗ノ下ニ古義、新義ノ両派アリ、／浄土宗ノ下ニ鎮西、西山ノ二派ア

リ、臨濟ノ下ニ／天龍寺、相国寺、建仁寺、南禪寺、東福寺、建長ノ寺、円覺寺、妙心寺、大徳寺、永源寺、法燈ノ／十一派アリ、真宗ノ下ニ本願寺派、大谷派、木辺、三ノ門徒、専修寺派、興正寺派、仏光寺派、出雲路派、／山元派、誠照寺ノ十派アリ、日蓮宗ノ下ニ／

(十七丁オモテ)

妙満寺、八兄、本成寺、本隆寺、興門、不受不施ノ六ノ派アリ、以上十一宗三十三派ナリ、／

### 第十三 俱舎大綱

俱舎トハ世親論主ノ著ハス所ノ論名ニシテ、具サニハ／阿毘達摩俱舎ト云フ、阿毘達摩俱舎ヲ訳シテ／対法蔵ト云フ、対法トハ無漏ノ智慧ヲ以テ四諦ノ理ヲ対觀シ、涅槃ノ果ニ対向スル意ナリ、蔵ノトハ此俱舎論ノ中ニハ発智論等ノ義理ヲ包ノ含シ彼ヲ所依トスルカ故ニ蔵ト云フナリ、此論ハ小ノ乗二十部ノ中有部ノ論ニシテ、一部九品三ノ

(十七丁ウラ)

十卷ハ諸法無我ノ理ヲ明スヲ以テ大意トス、別ノシテ云ハハ、前八品ハ有漏無漏ノ諸法ヲ明ス、第九ノ破我品ハ無我ノ真理ヲ明ス、是レ仏教ノ初ノ門ニシテ三世実有法体恒有ト立ツ、而ルニ俱ノ舎ハ有部ノ法義ヲ本トシテ明カセトモ、或ハ經ノ部ノ義ニ伴フコトアリ、実ヲ云ハハ世親ノ本ノ意ハ、偏党ノ情ヲ離レ、理ヲ長スルニ從フ意ノナリ、此俱舎論ヲ本拠トシテ修ノ学スルヲ俱舎宗ト云フナリ、／

(十八丁オモテ)

### 第十四 有漏無漏

漏トハ煩惱ノ異名ナリ、煩惱トハ有情ノ身心ヲ擾乱スルニ名ク、此煩惱ヲ漏ト名クルハ、漏ハ漏泄ノ／義又ハ随増ノ義也、漏泄トハ眼耳鼻舌身ノ意ノ六根門ヨリ貪瞋等ノ煩惱ノ過ヲ漏スカ故也、又随増ノ義トハ、煩惱ヲ縁トシテ身ノ口

(言?)ノ惡業ヲ増上スルコトナリ、此煩惱ヲ有スルノ有漏ト名ク、無漏トハ之ニ反スルモノナリノ

#### 第十五 四諦名義

四諦トハ苦集滅道ナリ、苦集ハ有漏ノ因果、ノ

(十八丁ウラ)

滅道ハ無漏ノ因果也、苦トハ逼迫ノ義ニシテ生ノ死ノ苦果ナリ、集トハ招集ノ義ニシテ苦果ノ因ナリ、其体煩惱ト業トナリ、滅トハ滅無ノ義ニシテノ有餘無餘ノ涅槃ナリ、是レ無漏ノ智力ヲ以テノ苦集ノ因果ヲ滅無シテ得ル処ノ果ナリ、ノ道トハ能通ノ義ニシテ、其体三学ヲ始メトシテ三十七ノ科ノ道品ナリ、是レ集諦ノ因ニヨリテ苦諦ノ果ヲ招キ、道体ノ因ニヨリテ滅体ノ果ヲ証スルノト云フカ迷悟(?)因果ノ相ニシテ、是レ声聞ノ觀ノスル理ナリ、此四諦ノ理ヘ有漏無漏共ニ前ノ

(十九丁オモテ)

果依因ナルハ如何ト云フニ、是レハ觀門ノ次第ニ約ノス、其故ハ修行者、始メニ生死ノ苦起ス、是レ苦諦ナリ、次ニ此苦ハ何ヲ以テ因トスト觀ス、苦ノ因ハ集諦ナリ、ノ次ニ此苦ハ何ヲ以テ滅スヘキヤト觀ス、是レ滅諦ナリ、ノ次ニ苦滅ノ因ヲ觀ス、是レ道諦ナリ、喩ヲノアケテ病ヲ見終リテ、次ニ病ノ因ヲ尋ネ、続テノ病ノ癒ンコトヲ求メテ良藥ヲ求ムルカ如シトアリ、ノ又此四ヲ各諦ト名クルハ審(真カ)実不虛ノ義ナリノ

#### 第十六 三世次第

凡ソ三世ノ次第ニ二種アリ、一ニ善惡業感ノ次第、此時ハ過ノ

(十九丁ウラ)

現未ト次第ス、其故ハ過去業ニヨリテ現在ノ果ヲノ感じ、現在ノ業ニヨリテ未來ノ果ヲ感スルナリ、二ニ法ノ相ノ生起ノ

次第、是ノ時ハ未現果ノ次第ナリ、其故ハ一切ノ有為法ハ未タ生起ノ因縁熟セサル間ハ、未來ニ／雜亂シテ住セリ、中ニ於テ因縁和合スル法ハ未／來雜亂住ヨリ現在ニ出テテ作用ヲ起シ、現／在ニ於テ作用終ルハ過去ニ落謝スルナリ、此二種ノ中、三世実有ト立ツル三世ハ後義ニ当ルナリ／

### 第十七 法体恒有

小乘二十部ノ中、有部ニ於テハ三世実有法／

#### (二〇丁オモテ)

体恒有ト立ツル 時無別体依法而立ト云フテ／三世ニ別体ハナケレトモ、三世ニワタリテ遷流スル法体ハ／恒ニ実有ナリト云フ、此三世ニワタリテ法体恒有ナル／由ヲ明スニ婆娑論ニ四説アリ、

一ニ法救ノ説ハ、類ノ不同ニヨリテ三世ノ異ヲ立ツル、有為法ノ未來ヨリ／現在ニ流至スルトキハ、未來ノ類ヲステテ現在ノ類ヲ／得ル、亦現在ヨリ過去ニ流至スルトキニハ、現在ノ類ヲ／ステテ過去ノ類ヲウル、是レ時類ノ得捨ニシテ／體ノ得捨ニアラス、故ニ類ニ約セハ三世ノ異ハアレトモ／體ニ約セハ実有ナリト立ツル、

二ニ妙音ノ説ハ／

#### (二〇丁ウラ)

相ノ不同ニヨリテ三世ノ異ヲ立ツル、是レハ三世ノ別相ノヲ立テテ、有為法ノ過去ニアルトキハ正ク過去ノ相ノト合スルカ故ニ過去ノ法ト名クレトモ、現未ノ相ヲ／離レズ、現在未來准シテ知ルヘシ、其正ク合スル相ニハ／三世ノ不同アレトモ、法体ハ恒有ナリト立ツル、

三ニ世友ノ説ハ、位ノ不同ニヨリテ三世ノ異ヲ立ツル、／有為法ノ未作用時ヲ未來ト云ヒ、正作用ノ位ヲ／現在ト云ヒ、作用謝スル時ヲ過去ト名クル、是レ／時位ニ約セハ三世ノ不同ナレトモ法体ハ恒有ナリト／立ツル、



四ニ覺天ノ説ハ、待ノ不同ニヨリテ三世ノ／

(二十一丁オモテ)

異ヲ立ツル、待トハ觀對ノ義ニテ、前ヲ後ニ望メ／テ過去ト名ケ、後ヲ前ニ望メテ未來ト云ヒ、前後／ニ望メテ過去ト云ヒ、中間ヲ現在ト云フ、是レ觀／體不同ニヨリテ三世ノ不同アレトモ、法體ハ恒有ナリト／立ツル、以上四説ノ中ニテハ、世友ノ義ヲ善説／トス、前後ノ説ハ何レモ過失アリ、因ニ云ク、小乘／二十部中、經部ニ於テハ現在有體過未無體ト／立ツル、此經部ニテハ本無今有已還無ト云フナリ、／然ルニ過去無體ト云ヘハトテ、三世ニワタリテ善惡／業感ノ義ナシト云フ義ニハアラス、唯諸法ノ體カ／

(二十一丁ウラ)

過去未來ニ實有ト嫌フノミナリ／四大ヲ分解スレハ極微トナル、／

## 第十八 有為無為

凡ソ一切方法ヲ大別スレハ二種アリ、一ニ有為法、二ニ無為法ナリ／一ニ有為法トハ、為作造作ヲ有スル法ナリ、是レ即チ因緣／合成ノ法ナリ、是ニ於テ諸法緣起ノ理ヲ知ルヘシ、中論／ニハ以此四緣万物得生トアリ、俱舍ニハ有因緣合諸法／即生トアリ、四緣トハ、一ニ因緣、是レハ親ク有為諸法／ヲ生スル因ナリ、二ニ等無間緣、是ハ心々所ノ生スル時／ニ前念ノ心々所力滅シテ後念ノ心々所ノ為ニ緣／

(二十二丁オモテ)

トナルナリ、三ニ所緣々、是レハ色等ノ所緣ノ境ハ能／緣ノ心ノ緣トナルナリ、四ニ増上緣トハ親因緣ノ有ル／上ニ外ヨリ助クル緣ナリ、是ノ四緣中、等無間緣ト所／緣々ハ心法ノ生スルニ限り、因緣ト増上緣トハ色心等／ノ諸法生スルニ通

スルナリ、故ニ草木等ノ生スルニハ因縁ノ増上ノ二縁ニヨリ、心法ノ生スルニハ俱ニ四縁ニヨルナリ、ノ是ノ四縁ニ由リテ生スル法ヲ有為法ト云フナリ、二ニ無ノ為法トハ前ニ反シテ因縁造作ヲ借ラス本来自有ノニシテ不生不滅ナルニヨレル即チ空虛<sup>ヤ</sup>及ヒ真理ノ如キノ是レナリ、ノ

(二十二丁ウラ)

第十九 諸法相攝

凡ソ一切諸法ハ無量ナリト雖モ、俱舍ニ於テハ之ヲ相攝スルニノ五位七十五法ヲ以テセリ、五位トハ、一ニ色法、是レハ眼ニ見ル処ノ青黄等ノ色ノミヲ云フニアラス、総テ變礙ヲ有スルモノヲ色トノ名ク、變礙トハ、變礙ト障礙トノ二義アリ、是ニ有見有ノ対色、無見無対色等ノ別アリ、二ニ心法、是ノ心ヲ、或ハ意トモノ識トモ名ク、心トハ集起ノ義ニテ、自説意ノ三業事ヲ集メ起スニ名ク、意トハ思量ノ義、事理ノ諸法ヲ思ノ慮量度スルニ名ク、識トハ了別ノ義、色声等ニ於テノ明了ニ識別スルニ名ク、三ニ心所法、是レハ心法ノ助伴ノ

(二十三丁オモテ)

ニシテ、前ノ心法ノ所有ノ法ナリ、王末從臣ト云フカ如ク、ノ心王ノ起ル時ハ必ス同時ニ相応シテ起ル者ヲ心所法ト云フナリ、ノ四ニ不相応法、是レハ其体心所ニ非レハ、心ト相応セス、又法ニモアラス無為法ニモアラスシテ、別体アルモノトスルナリ、五ニ無為法、是レハ本来本有ニシテ不生不滅ナルモノナリ、以上五位ヲノ開ケハ、色法二十一、心法ニ唯一、心所ニ四十六、不相応ニ十四、無為ニ三、合シテノ七十五法トナル、是ノ七十五ノ中、前ノ七十二位ハ有為法ヲ攝シ、後ノ三ニハ無為ノ法ヲ攝ス、故ニ一切法、是ノ五位七十五法ノ攝尽セサルハナキナリ、ノ

第二十 五位諸法

五位ノ諸法ノ中、第一ノ色法二十一種ノ別アリ、五根ト五境ノト無表色トナリ、五根トハ眼耳鼻舌身ナリ、五境トハノ

(二十三丁ウラ)

色声香味触ナリ、此五根五境無表色ノ十一ハ地水火風ノ四大所造ニシテ、五根五境ハ其体極微ノ聚成セ／ルモノナリ、無表色ハ極微ノ所成ニアラス、此五根ハ五／識ノ所依ニシテ、五境ハ五識ノ所縁ノ境ナリ、根境識ノ和合ト云フコトアリテ、五識ハ五根ニヨリテ五境ヲ瞭／別スルニ、此五根ニハ扶根勝義根ノ別アリ、五境ノ一々ニモ／種々ノ別アリ、次ニ無表色トハ、略シテ云ハ善惡ノ二種ア／リ、是レハ善惡業ヲ作レハ未來善惡ノ果ヲ招クコトノ定リテ心内ニ領納シ相統スルモノナリ、之ヲ無表ト名／クルハ身後ニ發動セズ、他ニ表示スルコト能ハサルカ故／

(二十四丁オモテ)

ナリ、第二ノ心法ニ六種ノ別アリ、之ヲ眼耳鼻舌身意／ノ六識ト云フ、此中前五識ハ色等ノ五境ヲ瞭別シ、／意識ハ一切法ヲ瞭別ス、是ニツキ自性分別、解積分別、／隨念分別ノ三種アリ、此中、前五識ニハ自性分別ノミ／アリ、意識ニハ三分別ヲ具スルナリ、第三ノ心所法ニ／四十六種ノ別アリ、此四十六ヲ分チテ六位トス、凡ソ六識／心王ノ起ルトキ、善ト惡ト無記ノ三性アリ、故ニ相応シテ起／ル所ノ心所ニオノツカラ差別アリ、故ニ六位中第一ノ大地法トハ、／總シテ善惡無記ノ三性ノ心ニ周遍シテ起ル心所ナリ、／第二ノ大善地法トハ、唯善心ノ起ル時ノミニ相応ス、第三ノ／

(二十四丁ウラ)

大煩惱地法トハ、唯染心ノミ相応スル、第四ノ大不善／地法トハ唯惡心ノミニ相応ス、第五ノ小煩惱地法トハ／一切ノ染汚心ト相応スルニアラス、小分ノ染心ト相応ス、／第六ノ不定地法トハ、前ノ五地ニアラス、善惡等ノ心ノ／起ル中ニ不応ルコト不定ナルモノナリ、第四ノ不相応法ノニ不四種ノ別アリ、得ト非得ト同分等ナリ、第五ノ無／為法ニ三種ノ別アリ、択滅ト非択滅ト虚空トナリ、／委クハ俱舍論等ニ出ツル、近クハ法宗原及ヒ七十五法ノ名目ニツイテ知ルヘシ、／

(二十五丁オモテ)

### 第二十一 三乘因果

三乗トハ声聞緣覺菩薩ナリ、声聞トハ仏説ノ法ノ声ヲ聞キテ修行シテ悟ル者ナリ、緣覺トハ十二因ノ縁ヲ觀シテ悟ル者ナリ、菩薩トハ具ニハ菩提薩／埵ト云フ、此ニ覺有情ト訳ス、仏果菩提ヲ求ムル人ノ也、此三乗ニ因果アリ、声聞ハ四諦ノ理ヲ觀スルヲ／因トシテ阿羅漢ノ果ヲ得ル、阿羅漢トハ殺賊不生ノ応供ト訳ス、緣覺ハ十二因縁ヲ觀スルヲ因トシテ辟支仏ノ果ヲ得ル、辟支仏トハ緣覺ト訳ス、菩／薩ハ六度ノ行ヲ修スルヲ因トシテ、仏陀ノ果ヲウル、／

(二十五丁ウラ)

仏陀トハ覺者ト訳ス、真理ヲ覺□□ニ名ク、／此中四諦ノ事ハ前ノ如シ、十二因縁トハ生死ノ因ノ果ナリ、十二トハ無明、行、識、名色、六処、触、受、愛ノ取、有、生、老死ナリ、此中、次ノ如ク過去ノ二因、現ノ在ノ五果、現在ノ三因、未來ノ二果ト分ツ、之ヲ三世ノ兩重ノ因果ト云フナリ、次ニ六度ノ行トハ、布施、持戒ノ忍辱、精進、禪定、智慧ナリ、／

### 第二十二 生空法空

此生空法空トハ、或ハ心空法空トモ云フ、凡ソ生死ノ流転ノ根源ハ、一切有情、生法ニ執ヲ起コスニアリ、／

(二十六丁オモテ)

上ノ諸法無我印ノ下ニテ略シテ弁セシ如ク、／有情トハ、色受想行識ノ五蘊ノ積聚セル上ニ見ノ聞覺知ノ作用ヲ為スノミ、然ニ実ニ五蘊ノ法ノ体アリ、我ノ用アリト執ス、木骨鬼形ノ譬ノ如シ、然ノニ生空觀ヲ修シ、生空智ヲ起シテ五蘊ノ体ニノ迷フ所ノ諸執ヲ対治シ、此ニ生空智ヲ得レハ、真理ヲ証ノスルコトヲ得ル、二執トハ雲ノ如ク、真理ハ月ノ如ク、二空ノハ風ノ如シ、此ニ二空ヲ斷スルハ、次ノ成実ト法相トナリ、／此俱舍ニテハ、生空ノミヲ明シテ法空ヲ論セス、知ノ慧淺キカ故也、故ニ我空法有ト立テ、五蘊ノ法体ノ

(二十六丁ウラ)

ハアレトモ五蘊中ニ実我ト云フヘキモノナシト云フ、歌ニ／引よせて結ヘハ柴ノ庵かな、解ケレハ元ノ野原ノなりけり／

### 第二十三 成実大意

トフ、俱舍モ此成実モ共ニ小乗ナレトモ、其差別スル所ハ／上ハ有門、是ハ空門ナリ、故ニトフ、俱舍ハ単ニ人空ヲ／明シ、今此宗ニハ具ニ人法ニ空ヲ明ス、則チ五蘊ノ／体事ニ迷フ所ノ人法ニ執ヲ破スルニ付ニ空觀ヲ／立テテ、以テ無我ノ真理ヲ証スルナリ、之ヲ成実ト／名クル所以ハ、阿含經等ノ三藏ノ中実義ヲ成／

(二十七丁オモテ)

スルト云フナリ、三藏ノ中ノ実義トハ、四諦真実ノ義理ナリ、其真実ノ義理トハ、人法ニ空ノ／理ナリ、然ニ成実ニ於テハ、ニ空ヲ論スルコトハ次ノ法相ノ大乘ト同シケレトモ、其差別アリ、成実ノ空ハ但空ニシテ／空ノ一辺ヲ執ス、大乘ノ空ハ空ニ即シテ不空ヲ論ス／ル等ノ差別アリ、／

### 第二十四 二執二障

ニ執トハ人法ニ執ナリ、二障トハ煩惱所知ノ二障也、／五蘊ノ用ニ迷ヘハ、人執ヲ本トシテ煩惱障ヲ起シ／五蘊ノ体ニ迷ヘハ、生執ヲ本トシテ所知障ヲ起ス、／

(二十七丁ウラ)

此二障ノ中、小乗ニテハ煩惱障ヲ染汚無為ト云フ、／則チ無明ヲ体トス、所知障ヲ不染汚無為ト云フ、即チ／劣慧ヲ体トス、其煩惱障ノ中、見思ノ二惑ハ／見惑トハ、人見所断ノ惑ニシテ見道ノ無漏智ヲ／以テ断スル惑ナルカ故也、見トハ無漏智ヲサス、思惑ノトハ思所断ノ惑ニテ、修道ニ於テ数々無漏智ノ／ヲ起シ、思惟シテ断スル惑ナルカ故也、又見惑ハ迷理ノ／惑ニテ、四諦ノ理ニ迷フテ起ル行相麤猛ニシテ邪思ノ邪教邪思惟ノ三縁ニ由リテ殊更ニ計度分別シテ／起スカ故ニ、

分別起ノ惑ト云フ、思惑トハ迷事ノ／

(二十八丁オモテ)

惑ニテ、色声等ノ事相ニ迷フテ起ルナリ、行相微劣ノニテ上ノ三縁ニヨラス、任運ニ起ルカ故ニ、俱生起ノ／惑ト云フナリ、是ニ付、見惑頓断如破石、思惑漸ノ断如藕糸ト云フアリ、次ニ所知障トハ、一切有為無ノ為ノ法所知ノ境ヲ覆フテ菩薩ノ智慧ヲ障ノヘテ生セザラシムル者ナリ、此ニ執二障ノ中、小乗ニテハ／人執ト煩惱障ヲ断スルノミ、大乘ニテハ二執二障ヲ／具ニ断スルナリ、則チ人空觀ヲ以テハ人執ト煩惱障ヲ断シ、生空觀ヲ以テ法執ト所知障トヲ／断スルナリ、／(二十八丁ウラ)

## 第二十五 律宗大綱

律トハ、具ニハ戒律ト云フ、戒トハ防非止惡ノ義ニシテ、身口意ノ非ヲ防キ、惡ヲ止ムルコトナリ、律トハ／法式ノ義ニテ、開遮持犯ヲ裁断スル規則ナリ、／世間ノ法律ヲ以テ犯罪ノ輕重等ヲ裁判スルカ如シ、此宗ニ於テハ、戒定慧ノ三学中、戒ヲ以テ要トス／戒ハ道基ト云テ、仏道修行ノ基本ナリ、此戒ノニ総相別相ノ異アリ、通戒別解脱ノ異アリ、又大／小乗ノ不同アリ、智度論ニ離殺生、離偷盜等ノノ十義ヲ總相戒ト云ヒ、余ノ無量戒ヲ別／

(二十九丁オモテ)

相戒ト名ク、又十住經ニハ諸惡莫作、衆善奉行、／自淨其意、是諸仏教ノ一偈ヲ以テ異戒トス、之モ／亦通戒トモ云フ、此外縁ニ從フテ制スル所ノ二百五十ノ戒等ヲ別解脱戒ト云フナリ、次ニ梵網經、瑜伽論ノ等ニ説クハ大乘戒ナリ、則チ十重禁戒、四十八輕戒等ノノ別アレトモ、總略スレハ三聚淨戒ナリ、曰ク攝律儀戒、／攝善法戒、攝衆生戒ナリ、又四分律等ニ説クハ／小乗戒ナリ当段ニ列スル如シ、今此戒律宗ハ、四分律ノ／当相ニ約スレハ小乗戒ナレトモ、南山律宗ノ本意ニ約／スレハ四分律ヲ□大乘ニ通スナリトシテ、然モ大乘ノ／

(二十九丁ウラ)

戒オモ撰スル意ナリ、／

## 第二十六 止作二門

凡ソ戒律ノ法門広大ナレトモ、之ヲ約スレハ止持作／持ノ二門トナル、止持門トハ諸惡莫作ノ方ニテ受／ケタル所ノ戒法ヲ持チテ身口等ノ惡ヲ止ムル事ノナリ、之ニ五戒八戒乃至五百戒ノ別アレトモ、其要ヲ取レハ／比丘ノ二百五十戒ト比丘尼ノ五百戒ノ中ニ収ムルナリ、／此二百五十戒ヲ分チテ八段トシ、或ハ五篇七聚トス、次／ニ作持門トハ衆善奉行ノ方ニテ、受ケタル所ノ／戒体ニ順シテ善ヲ修ムルコトナリ、之ニ受戒、二ニ説／

(三十丁オモテ)

戒、三ニ安居等ノ二十羯度ノ別アリ、然レハ戒律ノ／要ハ止作二持ニテ、止惡作善ノ外ハナキナリ

## 第二十七 化制二教

南山律師、仏一代ノ教ヲ判スルニ化制二教ヲ立ツ／化教トハ正因正果ヲ明シ、邪正ヲ識達セシメテ道俗／ヲ化益スルコトナリ、制教トハ戒律ヲ持タシメテ三業ノ／惡ヲ制スルコトナリ、此化制ノ二教ヲ三学ト三藏ニ／配スレハ、化教ハ經論ノ所詮、定恵ノ法門ナリ、制／教ハ律教ノ所詮、戒学ノ法門ナリ、／

## 第二十八 法体行相

(三十丁ウラ)

一切ノ戒律ヲ撰束シテ其要ヲアクレハ、戒法、戒体、／戒行、戒相ノ四科トナル、一ニ戒法トハ、仏ノ定ムル／所ノ戒律ノ法ナリ、此戒法トハ、スヘテ有情非情等ノ／万境ニ通スル、二ニ戒体トハ、受戒ノ人、戒師ヨリ戒ヲ／受ケテ発得シタル無表ノ戒体ニテ、心府ニ領納ス／ルモノナリ、三ニ戒行トハ、受戒ノ人、戒法ニ随順／シテ戒体ヲ護持シテ三業ニ運動

造作スル／コトナリ、四ニ戒相トハ、受戒ノ人、外相ニ戒徳顯ハレテ／戒律ヲ護持スル行相ノ他ノ為ニ規則トナルコト／ナリ、／

(三十一丁オモテ)

## 第二十九 法相大綱

此法相宗ニ於テハ、広ク一切諸法ノ性相ヲ決判シテ、／空有ノ二辺ヲ離レ唯識中道ノ真理ヲ証得／セシムルヲアラハス、其諸法トハ、有為、無為、有漏、無漏／等ノ万法ニテ、之ヲ該攝スレハ偏依円ノ三性ナリ／之ヲ開ケハ百法トナリ、瑜伽論ニハ六万六千法トス、此／性相ノ言ヲ解スルニ、法相門ニ約スルト、三性門ニ約スル／トノ別アリ、初二法相門ニ約セハ、性トハ五位百法、／相トハ偏依円ノ三性ナリ、五位百法ノ体性ニ偏／依円ノ三性ノ相ヲ具スル義ニテ、之ヲ体性相狀ノ／

(三十一丁ウラ)

義ト云フ、此五位百法ノ体ニ三性ノ相ヲ具スルトハ、百法ノ／中、暫ク色法ニツイテ云ハハ、此机ハ実ニ物体アリト／執スルハ遍計所執ナリ、此ノ机ハ四塵所成ニシテ／非有非無ナリト見ルハ依他起ナリ、又此ノ机ノ実／性ハ真如ノ理ナリト達スルハ、円成実ナリ、次ニ三性門／ニ約セハ、性トハ円成実、相トハ依他ノ諸法ナリ、此ヲ／性円相依ノ義ト云フナリ、此ノ性相ヲ三性ニ配スレハ／遍計所執ハ龜毛兎角ノ如ク、体性都無ナルカ／故ニ□テ論セサルナリ、次ニ唯識中道トハ、万法□／唯識所變ニシテ、能變ノ識ニ離レテ所變ノ境／

(三十二丁オモテ)

ナシト立ツルナリ、然ルニ□□ノ諸法ナシト云フニハアラス、／又唯識ト云フモ、唯々自識ノミノ所變ト云フニハアラス、／凡聖迷悟ノ所變各別ナリ、之ヲ唯識ト名クルハ、唯／トハ心外ノ境ハ空ニアラス、有ニアラスト簡ヒ、識トハ内／識ハ



空ニアラスト存ス、之ヲ三性ニ約セハ、遍計所ノ執ハ有ニアラスト云フカ唯ノ字、依他円成ハ空ニアラスト／云フカ識ノ字ナリ、此ヲ以テ唯識ノ字、非有非空ノ／中道ヲ顯ハス名目ナリ、中道トハ、真理ノ体ハスヘテ／偏有偏空ノ二辺ヲ離レタル事ヲアラハス名称ナリ、／尚□□、識變ノ義ノ下ニ至テ委ク弁スヘシ／

(三十二丁ウラ)

### 第三十 三時教義

法相宗ニ於テ一代經ヲ判スルニ三時ノ教相ヲ立ツル、三ノ時トハ有空中ナリ、抑々、仏、有情ヲ誘引センカ／為メニ、淺ヨリ深ニ至リテ次第ニ説キシタルカ有／空中ノ法門ニテ、深密經ニ出ツル、其中、一二有／教トハ、初時ニ於テ我空法有ノ旨ヲ説ク、之ハ／我人ノ思フカ如キ実我ハ空ニシテ無ナレトモ、五蘊／等ノ諸法ハ有ナリト示ス、之ハ外道凡夫ノ実／我ノ執ヲ破センカ為ニテ、阿含等ノ説ナリ、／二ニ空教トハ、第二時ニ於テ諸法皆空ノ／

(三十三丁オモテ)

旨ヲ説ク、是レハ初時ノ我空法有ノ教ヲ聞テ／我執ハ空シタレトモ、諸法実有ノ執ヲ起セシガ故ニ／其実法ノ執ヲ破サンカ為メニシテ、般若經等ノ／説ナリ、三ニ中道教トハ、第三時ニ於テ非有非空ノ／旨ヲ説ク、是レハ初時二時ノ偏有偏空ノ執ヲ破サンカ為メナリ、之ヲ三性ニ配セハ、遍計ハ非有／依因ハ非空ニシテ、空有ノ二辺ヲ離レタル中道ノ／妙理ヲ説クナリ、此三時ノ教相ニ付、涅槃經ニ服／乳ノ喩アリ、之ハ初ニハ皆乳ヲ服セシメ、次ニ総テ／乳ヲ断セシメ、后ニハ服スヘキ者ニハ服セシメ、服スヘカラ／

(三十三丁ウラ)

サルモノニハ服セサラシム、之ヲ有空中ノ三時教ニ配ス／尚ホ亦、此三時ハ年月前后ノ次第歟、義理深／淺ノ次第歟ト云フニ、年月ヲ本トシテ義教ヲ／兼ネテ云ヒタルモノナリ、其故ハ深密經ニ、初昔今ト／年月前后ノ次第ヲ説ケリ、其年月

ヲヘテ法ヲ／説ク中ニ、オノツカラ義理淺深ノ次第アリ、故ニ／年月ノ前后ヲ本トシテ、而モ説時ノ前后ニ拘／ラス、義ノ淺キ所ハ初時教ニ接シ、理ノ深キ処ハ／第三時ニ撰ス、則チ仏成道ノ最初ニ説ケル／華嚴經ヲ以テ第三時ニ撰ス、最后ニ説ケル遺教經／

(三十四丁オモテ)

ヲ以テ初時ニ撰スルカ如シ、／

### 第三十一 三種自性

一ニハ遍計所執性、二ニハ依他起性、三ニハ円成実性、／此三性ハ真妄ノ義ヲ総撰シテ空有ノ妙旨ヲ／アラハスノ法門ニシテ、一切万法、此ノ三性ヲ出ル者ナシ、／一ニ徧計所執性トハ、當時情現ノ相ニシテ、妄情ヲ／以テ周徧計度シテ執スル所ナリ、此中、能遍計ト／所遍計ト遍計所執ノ別アリ、此遍計所執ハ／無ノ上ニ有ト思ヒ、有ノ上ニ無ト思フ増益損減ノ／妄執ナリ、二ニ依他起性トハ、他ノ因縁ニヨリテ生

(三十四丁ウラ)

起セラレタル諸法ナリ、三ニ円成実性トハ、諸法ノ実性／ニシテ、円満、成就、真実ノ三義ヲ具セリ、此三性中、／遍計所執ハ体性都無ニシテ、情有理無ト云フ、依／他起性ハ如幻仮有、円成実性ハ凝然真如ナリ、／故ニ後ノ二ヲ理有情無ト云フナリ、然ニ此三性ハ／非一非異ナリ、其故ハ、妄執ト縁起ト真義トノ／差別アルハ非一ナリ、然レトモ此三義ハ一法ノ上ニ具スル／所ナレハ非異ナリ、之ニ付撰大乘論ニ此三性ヲ蛇／繩麻ノ喩ヲ以テ明シテ曰ク、其趣ハ、闇夜ニ繩／ヲ以テ蛇ナリト思フカ如キハ遍計所執ナリ、／

(三十五丁オモテ)

麻ノ集リテ仮リニ繩トナリタルモノト思フカ如キハ／依他起性ナリ、此ノ繩ノ実性ハ麻ナリト知ルカ如／キハ円成実性ナ

リ、／

### 第三十二 三種無性

一ニ相無性、二ニ生無性、三ニ勝義無性、是レハ上ノ／三性ニ対シテ此三無性ヲ明ス、即チ遍計ト依／他ト円成ニ対シテ、次ノ如ク相ト生ト勝義ト／ノ三無性ヲ立ツルナリ、此三無性トハ、第二時ニ於／テ一切法無自性ト説イタト、三性ノ外ニ別ノ体／アルニアラス、三性ノ上ノ増益ノ執ヲ除カンカ為ナリ、／

(三十五丁ウラ)

前ノ三性ト相對スレハ、三性ハ空執ヲ除キ、此三／無性ハ有執ヲ遺ル、一ニ相無性トハ遍計所執ハ体／相都無ナルカ故ニ相無自性ト云フ、二ニ生無性トハ、／依他ノ諸法ハ他縁ヨリ生レテ妄執スル如キ自然／性ナキカ故ニ、生無自性ト云フ、三ニ勝義無性トハ、／円成実ノ理ハ、前ノ遍計所執ノ我法ノ遠離／セルカ故ニ、勝義無自性ナリト云フ、此三種ノ無／性ヲ唯識等ニハ次ノ如ク、空華ト幻事ト大虚空トニ喩ヘタリ、／

### 第三十三

#### 【註】

- (1) 請求番号はE188/Eである。
- (2) この一部は既に発表している。拙稿「井上円了における伝統仏教学体系と仏教・哲学一致論―「八宗綱要ノート」から『仏教活論序論』へ」(『東洋学研究』第五十号、二〇一三年)
- (3) ジェームス・E. ケテラー著、岡田正彦訳『邪教／殉教の明治―廃仏毀釈と近代仏教』(ペリカン社、二〇〇六年四月)「第五章 歴史の創出―明治仏教と歴史法則主義」。拙稿「境野黄洋著『八宗綱要講話』について」(境野黄洋著『八宗綱要講話』USS出版(うしお書店新社、二〇〇九年四月))

- (4) 小栗栖香頂の十二宗は、①俱舍宗（佐伯旭雅）、②成実宗（上田照遍）、③律宗（上田照遍）、④法相宗（高志大了）、⑤三論宗（上野相憲）、⑥華嚴宗（小栗栖香頂）、⑦天台宗（上邨教観）、⑧真言宗（小栗栖香頂）、⑨浄土宗（福田行誠）、⑩禪宗（辻顕高）、⑪真宗（赤松連城）、⑫日蓮宗（小林是純）である。カッコ内は執筆者。
- (5) 時宗（町元吞空）、融通宗（町元吞空）、修験宗（町元吞空）を加える。カッコ内は執筆者。
- (6) 十二宗は、①法相宗、②華嚴宗、③天台宗、④真言宗、⑤融通念仏宗、⑥浄土宗、⑦臨済宗、⑧曹洞宗、⑨黄檗宗、⑩真宗、⑪日蓮宗、⑫時宗であり、それぞれについて、所依教典、宗名義理、立教開宗、師資相承、宗義要旨を述べる。
- (7) 三浦節夫「井上円了の初期思想（その二）」（『井上円了センター年報』一六、二〇〇七年）九〇頁。
- (8) 「第七結集三蔵」「周□□ノ説ニヨラハ周穆五十三年ニ当ル、明治十八年マテハ二千八百三十四年ナリ」（九丁オモテ）。「第八 仏教流伝」「是ヲ以テ本朝ニ仏教ヲ伝来セシヨリ、明治十八年ニテハ一千三百三十四年ナリ」（十一丁オモテ）。傍線は引用者。
- (9) 三浦節夫前掲論文、一一六頁。
- (10) インターネットサイト「近代デジタルライブラリー」によった（二〇一三年六月閲覧）。
- (11) 井上円了『真理金針』『続編』（『井上円了著作選集』第三卷、一九八七年）二四八頁―二四九頁。
- (12) 井上円了『真理金針』『続々編』（『井上円了著作選集』第三卷、一九八七年）二五六頁―二五八頁。
- (13) 井上円了『八宗綱要』十一丁ウラから十二丁ウラ
- (14) 凝然『八宗綱要』の天台宗の項目では、有、空、亦有亦空、非有非空の四門について、三蔵教は四門を具し、通教にも四門があるが多くは空門であり、別教にも四門があるが多くは亦有亦空門であり、円教にも四門がある多くは非有非空であると説く。
- (15) 井上円了「加藤老博士について」（『東洋哲学』第二十二編第八号、大正四年）
- (16) 念速寺は現在も東京都文京区白山にある。
- (17) 吉谷覚寿『仏教大旨』（仏書出版社、明治十九年）緒言 一頁―二頁。
- (18) 吉谷覚寿『仏教総論』（明治二三年）序文 一頁―三頁。

吉谷寛寿『明治諸宗綱要』序文「然ルニ輓近、社会ノ文運ニ随フテ、世ノ中ニ仏教ノ講論、盛リニ行ナハルルニ至リシハ最モ賀スヘキコトナレトモ、窃ニ其体勢ヲ矚ルニ、講義ニモアレ、演説ニモアレ、或ハ一時青年輩ノ甘心ヲ得ンカ為ニ、濫リニ仏教ト他学ト比較スル者アリ、例ヘハ彼ニ唯物論アレハ我ニ俱舎ノ三世実有法体恒有ノ説アリ、又彼ニ唯心論アレハ我ニ唯識ノ森羅万有唯心所変ノ説アリ、又彼ニ哲学ノ万有虚靈ノ存在ト自覚ノ関係ヲ論スルアレハ、我ニ華嚴家ノ心仏衆生是三無差別ノ説アリ、又彼ニ靈性学ノ主観客観純全ノ三靈性ヲ論スルアレハ、我ニ天台家ノ空假中三觀円融ノ談アリ、又彼ニ哲学原理生物原理ノ学術アレハ我ニ真如縁起法界縁起ノ理論アリ、我何ソ彼ニ劣ランヤト、恰モ甲乙ノ両家、互ニ財産ノ多少ヲ競争スルカ如シ、嗚呼コレ何ト謂フコトソヤ、」(明治二十三年)一頁、二頁